



裏道を走っていると、曲がり角から猫！

こっちに、やって来る。

キジトラ模様……、いまは、もう、いないけど、オレの

猫にそっくりだ。

「オータム！」思わず呼ぶと、

「なーん」と鳴いて、胸に飛びこんできた。

うれしくなって、ぎゅうっとしたのと、

「まてー」と叫び、大きな男の人が現れたのは同時だった。

その人も、こっちに、やって来る。

黒いTシャツ、黒ズボン。髪はボサボサで、目が怖い。

この人に、待てと言われても、待ちたくない。

逃げよう！としたが、遅かった。

男の人は俊敏で、オレの前に立ちほだかった。

「おまえ、猫、大丈夫なのか？」大きな人が一歩近づく。

「ね、猫は大好きだ！それが？」オレも前へ、半歩だけ。

「そうか！では、頼む」

「た、頼むって？」

「その猫の世話に決まってるじゃないか」

「き、決まってる？」

「近所のばあさんに無理やり押しつけられたんだ。庭に迷いこんできたのを保護したそうだ」

大きな男の人は、オレの抱えたキジトラ猫を指さした。

「じいさんは猫アレルギーだからと、ばあさん、嫌がるワシにそいつを押しつけて、飼い主探しに奔走中だ」

「だ、だから？」

「だから、つまり、猫嫌いのワシと猫好きのおまえ。猫の